目宅で病気と向き合う

6

薬と安心 お届けします

高知市で調剤薬局を開く薬剤師の川添哲嗣(44)は、13年前に出会った患者が今も忘れられない。

70歳代の独り暮らしの女性で、重い糖尿病を患っていた。2週間に一度、病院で外来受診した後に川添の薬局に寄り、注射薬のインスリンや血糖値を下げる薬を受け取っていた。

6月のある日のことだ。女性は突然、川添に告げた。

「糖尿が悪くなっているから、足を切るしかないって、先生に言われた」

川添は驚いた。薬をきちんと服用していたら、そこまで悪化するはずがないのに。

2週間後は大雨だった。

川添の薬局に女性から電話がかかってきた。診察が終わったが、雨でタクシーがつかまらないという。「病院まで薬を持ってきて。ついでに家まで乗せてって」。川添は「自宅の様子を知るチャンスだ」と考えてすぐに営業車を出し、女性を自宅へ送った。

居間に入ると、薬が散乱していた。冷蔵庫には未使用のインスリンがどっさりあった。薬が多すぎて収拾がつかなくなっていたのだ。

川添は女性に一つひとつの薬の効き目を説明し、薬局から「服薬カレンダー」を持ってきて壁に貼った。薬の飲み忘れを防ぐため、日付の所に朝昼夕夜に分けて透明なポケットがついたカレンダーだ。

その日以降、川添は毎週、女性宅への訪問を続けた。

3カ月後、薬局に弾んだ声が響いた。彼女だった。

「足、切らなくてもいいって！」。女性の笑顔に、川添は目が覚める思いがした。

薬を渡すだけなら、販売員と同じだ。患者がきちんと飲めているか、薬は適切に効いているか。そこまで心を配るのが薬のプロなんだ。

「おれがしたかったのは、こういう仕事だ」

以来、「訪問薬剤師」が川添の仕事の中心になったが、ほとんど理解されなかった。患者の家に薬を持っていくと、玄関先で「そこに置いといて」と言われ、家に上げてもらえなかった。医師でさえ、薬剤師のことを「薬局のガラス窓越しに薬を出す存在」と見なしがちだった。

同じころ、栃木市で薬局チェーンを経営する薬剤師の大澤光司(50)も、川添と似た悩みに直面していた。

十数年前、地元医師に頼まれて通院困難者の訪問服薬指導を始めた。だが、患者宅を訪ねるたびに「何しに来たの」と不審がられた。

それでも訪問を重ねるうち、足元がふらつき、トイレに行くにも助けが必要な在宅患者に出会った。医師は「老化」の一言で片づけていた。

ところが、大澤が薬の一覧をよく見ると、副作用でふらつきを起こしやすい薬が複数、処方されていた。「薬が原因じゃないか」。大澤が医師に意見を伝えると、医師は薬を変えた。すると、患者は一人で歩けるようになった。

複数の病院にかかる患者は多いが、それぞれの病院でもらう薬が相互作用で思わぬ症状を引き起こすこともある。これを見抜けるのは薬剤師だけだ。「在宅で安心安全に服薬してもらうには自分たちの力が欠かせない」と大澤は確信した。

川添と大澤は2006年、日本薬剤師会の会合で出会った。同じ席には、宮崎で訪問を始めた薬剤師もいた。

「あちこちに、同じ思いの薬剤師がいるんだ」。情報やノウハウを共有して、悩みを相談しあう集まりをつくりたいと考えた川添らは昨年11月、「全国薬剤師・在宅療養支援連絡会」を結成した。現在、会員は500人を超す。

3月の東日本大震災では、会長に就いた大澤や副会長の川添も被災地へ駆けつけ、日ごろ飲んでいる薬が流されて薬品名がわからないと訴える多くの人々に出会った。

「色や形の情報だけで薬の名を突き止められるのは、薬剤師だけです」と大澤は語る。薬剤師が活躍する場は、薬局だけにとどまらない。

（中村通子）

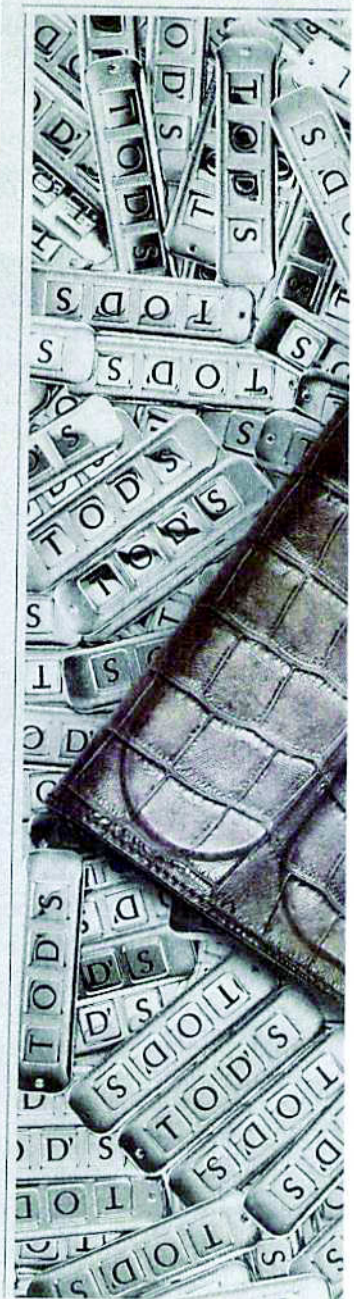
川添哲嗣さん

大澤光司さん

額2兆円超

会談し、今年度第4次予算案の編成を指示し総額2兆円超で、円高対被災地の二重ローン対どを盛り込み来年の通

4次にわたるのは1947年度以来。首相は「12月中旬までに閣議決定できるよう組んでほしい」と指示した。

4次補正ではこのほか、タイの洪水対策を支援し、自治体向けに交付税を追加する。安住氏はまた、環太

込む意向も示した。財源について、安住氏は「赤字国債は発行せず、国債費の不用額などの中で対応する」と明言。今年度当初予算で計上した国債費（約21兆5千億円）の利払いの余りなどを活用する方針だ。